

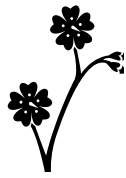
日本の歌

ひびきの魅力・ことばの力

【曲目解説】

うたがことばをおもいだす
ことばがうたをおもいだす





日本の歌 ひびきの魅力・ことばの力

— 第1部 —

早春賦

作曲：中田章 作詞：吉丸一昌

「春といっても名ばかりで風は寒い」と歌い始めるこの曲、まだ寒さを感じる立春の頃の、しかし春を思い、心たかぶるさまが爽やかに表現されています。

からたちの花

作曲：山田耕筰 作詞：北原白秋

4月のある日、ふと目にした小さな白い花、その特徴的な花から幼き日々の情景へと、想いはふくらんでいきます。「からたちの花が咲いたよ」という歌詞が、「みんなみんなやさしかったよ」という言葉の後に繰り返されると、出だしの印象とはまったく異なった響きをもつことを感じてみてください。

ペチカ

作曲：山田耕筰 作詞：北原白秋

ロシア由来の暖炉ペチカ、ペチカのイメージといえばこの歌だ、という人も少なくないはずです。聞いているうちに魔法のような暖かさが心の中にひろがっていくのは、暖炉の炎が想像されるからだけではなく、ペチカに集って話をする友の存在が歌われているからでしょう。

赤とんぼ

作曲：山田耕筰 作詞：三木露風

鈴木三重吉の創刊した雑誌《赤い鳥》には、北原白秋、西條八十、三木露風といった詩人たちが作品を寄せていました。「赤とんぼ」は三木露風が北海道のトラピスト修道院で生活していた頃の作品です。北海道の大地で見る赤とんぼはどんなだったでしょうね。

かやの木山の

作曲：山田耕筰 作詞：北原白秋

秋の夜を舞台とした不思議なユーモアをたたえた子守歌です。小さなかやの実につられて、幼子の空想は遠い山里へと誘われます。いろいろの音、かやの実がはぜる音、鳴りやまない雨音、小さく鳴くお猿の声に囲まれながら、幼子はやがてやすらかな眠りにつくのでしょうか。

中国地方の子守歌

作曲：山田耕筰 岡山県民謡

すやすやと眠る子はかわいけれど、起きて泣いている子は憎らしいばかり。子守りのつらさは昔も今も変わらないものかもしれません。昔は奉公に出された若い少女たちが子守りに苦しんだことでしょう。とはいえ初宮参りには、やはり先の幸福を祈らずにはおれません。これもまた、昔も今も変わらないことです。

ふるさと 故郷

作曲：岡野貞一

「おぼろ月夜」「春の小川」など、高野辰之が作詞し岡野貞一が作曲した名曲は少なくありません。「うさぎ追いかの山、、、」と、自然に歌詞が浮かんできますね。

ゴンドラの唄

作曲：中山晋平 作詞：吉井勇

「いのち短し恋せよおとめ」という印象的な歌詞が、淡々としたリズムにのせて歌われます。単調に繰り返されるゴンドラの櫂、そしてその下を流れる運河の波、音楽が背景を静かに描き出し、ともすれば強烈になりすぎそうな言葉が、しっくりと心にしみこんでいきます。

あの町この町 作曲：中山晋平 作詞：野口雨情

野口雨情は、北原白秋や西條八十とならぶ詩人で、中山晋平とは「シャボン玉」などの名曲を多数作っています。どこまでもどこまでも歩いてきた、遊びなれた道、それが、夕やみ迫る時間になると、それまでとは違った顔を見せるようになります。ちょっと心細い気持ちで家路を急ぐ、そんな子どもの心が繰り返される音楽に凝縮して表現されているようです。

浜辺の歌 作曲：成田為三 作詞：林古溪

伴奏に耳を傾けると、「ゴンドラの唄」で描かれた波音とは違った、もっとゆったりとした、寄せては返す浜辺の波の音が聞こえてくるようです。当初、一番から四番まであった歌詞も、現存するのは三番までで、その三番の歌詞は詩人の意図を正確に表現してないという理由で、今ではあまり歌われることがありません。

かなりや 作曲：成田為三 作詞：西條八十

「唄を忘れたかなりや」とは、貧困に苦しみ、詩作をあきらめかけた西條八十の姿であると言われています。力なく萎えてしまったかに見えたカナリやは、幻想的な美の世界に再生します。曲想の変わった四番では 3/8 拍子の流麗な音楽がカナリヤの声を表現しているようです。

宵待草 作曲：多忠亮 作詞：竹久夢二

このあまりに短い、それでいて鮮烈な印象を残す歌は、美人画で知られる竹久夢二の三行詩を多忠亮が歌にしたものです。むせび泣くような扇情的なフレーズは、作曲家がヴァイオリン奏者であったことにもよるのでしょう。

蘇州夜曲 作曲：服部良一 作詞：西條八十

文学者であり、童謡の詩人でもあった西條八十は、歌謡曲の作詞家としてよく知られるようになりました。「蘇州夜曲」は 1940 年の東宝映画「支那の夜」で李香蘭こと山口淑子が歌い大ヒットした曲です。ジャズから出発した服部良一は、東洋のベニスとして名高い蘇州の情景を甘く切ないメロディーで見事に表現しています。



— 第2部 —

夏の思い出 作曲：中田喜直 作詞：江間章子

社会に明るさが見え始めた昭和 24 年、NHK ラジオ歌謡で流れた「夏の思い出」。まさに戦後国民歌謡の代表作といえるでしょう。中田喜直が、その後の旺盛な作曲活動のスタート地点で作った不朽の名作です。

さくら横ちょう 作曲：中田喜直 作詞：加藤周一

加藤周一は思想家、評論家として知られていますが、「マチネ・ポエティック」という日本語による押韻定型詩を作る文学グループに参加した詩人でもありました。この「さくら横ちょう」という詩は、十四行のソネット形式で書かれ、「と」および「おう」という脚韻が踏まれています。一方の中田喜直は、詩の形式をことさらに意識するのではなく、さくらの花びらの舞う光景を繊細な音の世界へと素直に変換しているかのようです。

ちいさい秋みつけた 作曲：中田喜直 作詞：サトウハチロー

サトウハチローと中田喜直が生み出した名曲中の名曲。たたみかけるような歌い出しから、繊細な秋の予兆の情景描写が展開されていきます。平明でありながら奥の深い詩の世界に、あらためて感心せざるをえません。

ああプラントン無理もない 作曲：中田喜直 作詞：サトウハチロー

サトウハチローならではの洒脱な表現の真骨頂とよべる作品です。「～です」と繰り返しながら、独特なリズムを作り出し、はにかむような、切ないような、ほのかな心模様が巧みに表現しています。

あめふりくまのこ 作曲：湯山昭 作詞：鶴見正夫

東京芸術大学作曲科を昭和 30 年に卒業し、多様なジャンルで作曲活動を行っている湯山昭は、童謡の世界でも素晴らしい曲を作り、音楽の楽しさや喜びを子どもたちに伝えてくれます。「あめふりくまのこ」では、そんな湯山昭の優しさが柔らかい毛布のような音の世界を作りだしています。

おはなしゆびさん 作曲：湯山昭 作詞：香山美子

「おはなしゆびさん」は、とても簡単な《手遊び歌》とも言えますね。音楽と手の動き、そして、もちろん顔や声の表情をいっぱい使って、親子のコミュニケーションを豊かにするための素敵な道具となってくれます。

おつかいありさん 作曲：團伊玖磨 作詞：関根榮一

團伊玖磨も子どもの曲を多数作っています。「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」などは、誰でも知っている童謡ですね。ユーモアに満ちた「おつかいありさん」は、あの「かえるのうた」と同じ関根榮一とのコンビで作られた作品です。

はる 作曲：團伊玖磨 作詞：谷川俊太郎

谷川俊太郎の詩には、いつも新鮮さがあります。「はなをこえて」という歌詞は、すぐに「はなをこえ」と短く軽くなって大空へ飛翔していき、やがて、どこか静かな場所に降り立って神と触れ合う。大胆な言葉の展開を團伊玖磨の音楽が十分に表現しているといえるでしょう。

花の街 作曲：團伊玖磨 作詞：江間章子

昭和 22 年、「夏の思い出」と同じように NHK ラジオ歌謡で流れました。街も色づいていく春の楽しさや躍動感、そして、そんな春にひとり居ることの寂しさを、あくまでも爽やかに描き出しています。

○と△の歌 作曲：武満徹 作詞：武満徹

昨日のしみ 作曲：武満徹 作詞：谷川俊太郎

小さな空 作曲：武満徹 作詞：川路明

武満徹が戦後日本を代表する作曲家のひとりであることは間違いありません。しかし、いまだ伝説のベールから自由に語られることの少ない人物であり、等身大の武満徹が見えてくるのは、まだこれからのことなのかもしれません。「○と△の歌」は、映画『不良少年（羽仁進監督）』、「小さな空」は、ラジオドラマ『ガン・キング』のために書かれた曲です。また、「昨日のしみ」は歌手の小室等さんに捧げられたものの、武満は初演を聞くことなく他界しています。いずれの曲もポップな軽さの中に、粹な詩心がこめられています。